

女子大学生のキャリア意識

学年差および理想とするライフコース別の検討

Career awareness of women's university students
Studies on the grade difference and the Ideal life course

戸田 里和¹, 岩瀬 靖彦²

¹大妻女子大学人間生活文化研究所, ²大妻女子大学家政学部

Satowa Toda¹, Yasuhiko Iwase²

¹Institute of Human Culture Studies, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

²Department of Home Economics, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：女子大学生, 理想ライフコース, キャリア意識

Key words : Women's university students, Ideal life course, Career awareness

抄録

本研究は、女子大学生のキャリア意識をCAVT（キャリア・アクション・ビジョン・テスト）を用いて解析し、学年差ならびに理想とするライフコース別のキャリア意識を明らかにすることを目的とした。女子大学1年から4年生の307名を対象とし、理想とするライフコースと厚生労働省「第15回出生動向基本調査」を比較した。その結果、本対象者は代表サンプルと分布がほぼ一致していた。学年差の分析結果は、「1・4年」は「2・3年」よりビジョン得点が高値を示し、アクション得点では、「4年」は「3年」より、「1年」は「2・3年」より高値を示した。「1・4年」は「2・3年」に比べ、キャリア意識が高いことが示唆された。理想とするライフコース別の分析結果は、アクション得点では有意差がみられない一方で、ビジョン得点では、「両立・非婚就業」は「わからない・専業主婦」より高値を示した。「両立・非婚就業」を選択した女子大学生は、「わからない・専業主婦」の女子大学生に比べて、将来設計に対する意識が高いことが示唆された。

1. 問題および目的

1.1. はじめに

平均寿命の延伸による職業生活の拡大やライフスタイルの変化、高学歴化など、女性の生活自体が構造的に変化し、働き手としての女性が求められている。国立社会保障・人間問題研究所が2015年に実施した「結婚と出産に関する全国調査（以下、15年度調査）」調査によると、未婚女性が理想とするライフコース（以下、理想ライフコース）は、1990年代より専業主婦コースが減少し、その後は両立コースが穏やかな増加傾向にある^[1]。

一方、2011年度から文部科学省は、大学の教育課程に「社会的・職業的自立に関する指導等（キ

ャリアガイダンス）」を義務付けた^[2]。若者の無業者・失業者の急増、フリーターの増加、就業後の早期離職の増加を食い止めるべく、主体性と市民性を身に付けた創造性豊かな逞しい職業人を世に送り出すことが、大学における共通使命となった。近年の特徴としては、さまざまな形でキャリア教育・キャリアデザイン（設計）・キャリアガイダンス（以下、キャリア教育）などの取り組みが行われ、大学入学直後から実施されているところも見受けられる。しかし、女子大学における教育現場では、已然として専業主婦への憧れや出産を機に退職を希望するなど、生涯働き続けるという意識の低い状況がうかがえた^[3]。

本研究では、実証的な手法を用いて、女子大学生（以下、女子大生）のキャリア意識に関する実態調査を行う。キャリア意識という概念は多様な捉え方があるが、本研究では就職活動に関連したものに限定する。女子大生のキャリア意識と学年差や理想ライフコース別のキャリア意識を明らかにすることで、女子学生の教育指導と支援の方策を探るための基礎資料を得ることを目的とする。

1.2. 先行研究とリサーチクエスチョン

男女共学の大学4年間の継続調査から、希望業種の男女間比較を行った林ら^[4]によれば、女子学生は男子学生よりも希望業種の偏りが大きく、かつ限定されたものであると指摘する。女子学生がイメージだけに流されないように、正確な企業情報や業種情報を提供する必要性を述べ、男女別のキャリア支援の有用性を示唆する。また、キャリア教育が、就職結果へと続くキャリア意識に与える影響を統計的に検証した平尾^[5]によれば、女子学生の将来に対するビジョン意識は、男子学生より低いとしている。ここで示すビジョン意識は、将来に向けた夢や目標、やりたいことなどを明確にすることと定義されている。女子学生のビジョン意識が男子学生に比べ低値となる要因の一つに、女子学生の性役割意識が考えられる。佐野ら^[6]の大学生における性役割志向によるライフコース観の比較結果からは、性役割志向の如何に拘わらず、出産・育児の期間は家庭を重視する傾向が認められると述べ、その傾向は現在も根強いと思われる。

これらの先行研究は、女子大生の性役割意識や理想ライフコースが、キャリア意識にも影響を及ぼす可能性を示唆する。女子学生は男子学生に比べ人生のライフイベントが多く、結婚・出産・育児などがもつ将来のライフキャリアやワークキャリアへの影響が大きい。その結果、将来のビジョンを描くことが難しい状況にあるとも推測される。女性自身が、性役割に依存するのではなく、一人の人として社会のなかで自立し生きていくためには、自己の役割を果たす重要性を認識させる支援が成人女性に対して必要であると渡辺^[7]が述べるように、現役の女子学生に対しても同様の支援が急務であり、キャリア意識別のキャリア支援・教育の必要性が生じている。

本研究は、女子大生を対象とした調査である。15年度調査のように、標本抽出し調査対象を選定

するか、あるいは、すべての女子大学に所属する女子学生を対象に調査すべきではあるが、個人が実施する調査では不可能に近いといえる。そのため、本研究では、女子大生の理想ライフコースを導出することを最初のリサーチクエスチョンとし、15年度調査の結果と比較することで代表サンプルとしての可能性を探ることとする。

RQ1 女子大生の理想ライフコースはどのようなものか。15年度調査と違いはあるか。

次に、キャリア意識を導出する。平尾^[5]のキャリア教育の効果検証からは、女子学生の将来に対するビジョン意識は低いことが示されたが、性差の比較に留まっている。本研究では、女子大生のキャリア意識を詳細に分析するためにも、学年別と理想ライフコース別において検討する。

RQ2 学年でキャリア意識に違いはあるか。

RQ3 理想ライフコース別でキャリア意識に違いはあるか。

これらが明らかになることで、女子大生のキャリア教育指導や支援の施策を考える一助になると考える。

2. 方法

2.1. 調査時期と対象者

2017年4月、都内にある偏差値レベルが同程度の2つの女子大学に在籍する1年生から4年生331名に質問紙調査を実施し、記入漏れ、記入ミスを除いた合計307名を分析対象とした。

2.2. 質問項目

(1) 理想ライフコース

女子大生の理想ライフコースを尋ねる項目は、15年度調査から採用した。本調査では、①専業主婦、②再就職、③両立、④DINKS、⑤非婚就業、の5つのライフコースと、⑥わからない、の計6つの選択肢の中から、ひとつを選ぶ方式とした。

(2) キャリア意識

キャリア意識を尋ねる項目は、下村ら^[8]によるキャリア意識の発達に関する効果測定テスト（キャリア・アクション・ビジョン・テスト：CAVT）

を採用した。この尺度は、キャリア自己効力感研究を基礎としており、将来に向けてどのくらい熱心かつ積極的に行動しているかを測定する「アクション」6項目と将来に向けてやりたいことなどをどのくらい明確にしているか、またはそれに向けて準備しているかを測定する「ビジョン」6項目の合計12項目で構成される。本調査では、「かなりできている」(5)～「できていない」(1)の5件法とした。

3. 結果

3.1. 理想ライフコースの比較

15年度調査の結果報告書^[1]では、学歴別、理想ライフコース別、未婚者等(女性)に集計されている。そのため、本調査データと15年度調査の該当箇所である女子大学データを抽出した(表1)。

表1. 理想ライフコース比較

	数値: % 実数:()					
	専業主婦	再就職	両立	DINKS	非婚就業	わからない
17年度本調査	17.36(54)	35.69(111)	32.15(100)	3.54(11)	4.50(14)	6.75(21)
15年度調査	16.97(37)	38.07(83)	32.11(70)	2.75(6)	5.50(12)	4.59(10)

※15年度調査の結果報告書を引用・調整後、筆者データと合わせて作成。

女子大生(未婚)が理想とするライフコースは多い順に、「再就職」35.69%、「両立」32.15%、「専業主婦」17.36%、「わからない」6.75%、「非婚就業」4.50%、「DINKS」3.54%であった。分布状況を視覚的に捉え、15年度調査との比較を容易にするためのグラフを図1に示す。

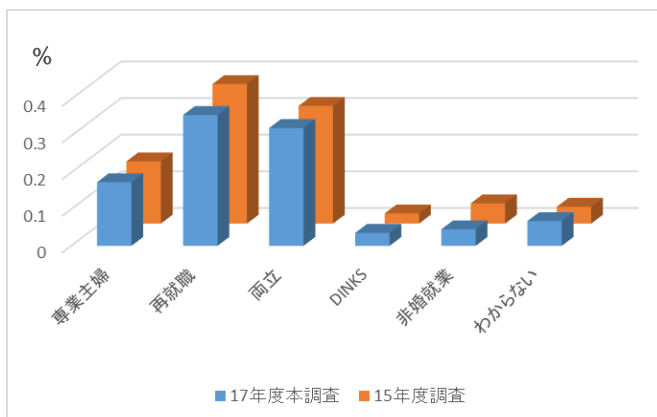


図1. 理想ライフコース比較

「専業主婦」「再就職」「両立」「DINKS」「非婚就業」の割合は図1からも概ね同傾向であることが確認された。

3.2. キャリア意識の基礎的分析

CAVTの12項目の平均値は、3.31から2.54の間に分布していた(表2)。ヒストグラムでも確認したが、過度な偏りを持つとみなされる項目はなかった。平均値の高い項目は「将来のことを調べて考える」($M=3.31, SD=1.01$)「何ごとにも積極的に取り組む」($M=3.19, SD=1.01$)であった。一方、平均値の低い項目は「尊敬する人に会える場に積極的に参加する」($M=2.54, SD=1.08$)「将来のビジョンを明確にする」($M=2.77, SD=1.05$)であった。

表2. CAVTの基礎統計

項目	M	SD
将来のことを調べて考える	3.31	1.01
何ごとにも積極的に取り組む	3.19	1.01
将来、具体的に何をやりたいかを見つける	3.06	1.03
自分が本当にやりたいことを見つける	3.06	1.00
様々な視点から物事を見られる人間になる	3.06	0.88
人生に役立つスキルを身につける	3.00	0.96
様々な人に出会い人脈を広げる	2.92	1.17
将来に備えて準備する	2.92	0.96
将来の夢をはっきりさせ目標を立てる	2.85	1.04
学外の様々な活動に熱心に取り組む	2.79	1.11
将来のビジョンを明確にする	2.77	1.05
尊敬する人に会える場に積極的に参加する	2.54	1.08

3.3. CAVTの信頼性と得点化

本研究では、下村ら^[8]のCAVT尺度12項目を採用したため、はじめに主成分分析を行った。その結果、2因子構造が妥当であり、第1因子6項目は「ビジョン」因子、第2因子6項目は「アクション」因子が確認された。CAVTは、それぞれの6項目を単純合計することによって得点を算出し、その値の大きさによってキャリア意識を示すものとしている。そのため、各得点の信頼性を検証するためにクロンバックの α 係数は、ビジョン $\alpha=.900$ 、アクション $\alpha=.809$ であり、信頼性は十分に備わっているものと判断し、全項目を使用してキャリア意識の指標とした。得点化については、「かなりできている」5点、「ややできている」4

点, 「どちらとも言えない」3点, 「あまりできていない」2点, 「できていない」1点として6項目の合計得点を求めた. ビジョン得点とアクション得点の分布状況を視覚的に捉えるために, 図2ヒストグラムを示す. ビジョン得点の平均は17.96点 ($SD=4.967$) 最低点6点, 最高点30点, アクション得点の平均は17.48点 ($SD=4.456$) 最低点6点, 最高点29点であった.

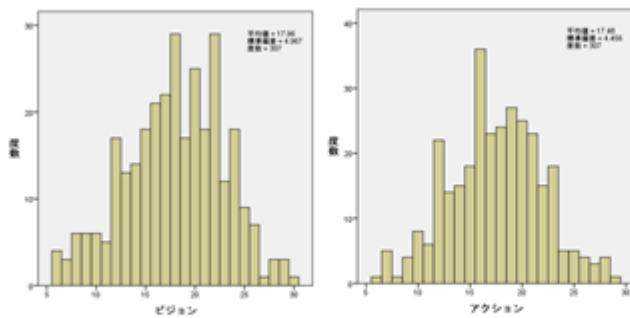


図2. ビジョン得点・アクション得点ヒストグラム

3.4. 学年差の検討

前述のビジョン得点・アクション得点を用いて, 学年別得点の平均値を比較した(表3). 学年の影響を分析するために, 一元配置分散分析を行った結果, 学年の効果に有意差が認められた. Tukey b (5%水準) を用いた多重比較では, 「1・4年」は「2・3年」よりビジョン得点が高値を示した. また, アクション得点は「4年」は「3年」より, 「1年」は「2・3年」より高値を示した(表3).

表3. 学年別のCAVT平均値

		1年生	2年生	3年生	4年生	F検定
ビジョン得点	n	53	152	53	49	$F=14.614$
	M	20.38	16.67	16.87	20.55	$df=3, 303$
	SD	3.471	5.246	3.981	4.542	$p<.001$
アクション得点	n	53	154	52	48	$F=6.415$
	M	19.45	16.86	16.44	18.42	$df=3, 303$
	SD	3.226	4.717	4.552	3.891	$p<.001$

3.5. 理想ライフコース別の検討

理想ライフコース別にビジョン得点とアクション得点の平均値を比較したグラフを図3に示す.

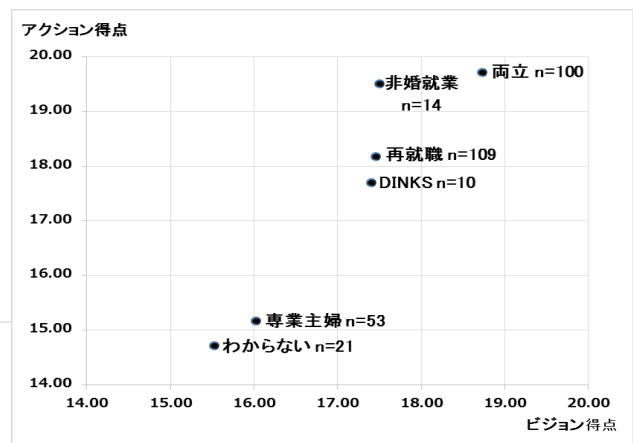


図3. 理想ライフコース別のCAVT平均値

理想ライフコースの影響について一元配置分散分析の結果, 理想ライフコースの効果に有意差が認められた(表4). Tukey b (5%水準) を用いた多重比較によれば, 「両立・非婚就業」と「専業主婦・わからない」の間に有意差が認められ, 「両立・非婚就業」と答えた学生は, ビジョン得点が高値を示した. 一方, アクション得点には, 有意差は認められなかった.

表4. 理想ライフコース別のCAVT平均値

		専業主婦	再就職	両立	DINKS	非婚就業	わからない	F検定
ビジョン得点	n	53	109	100	10	14	21	$F=8.968$
	M	15.17	18.17	19.71	17.70	19.50	14.71	$df=5, 301$
	SD	4.689	4.805	4.340	2.983	6.454	4.734	$p<.001$
アクション得点	n	54	109	99	10	14	21	$F=3.677$
	M	16.02	17.46	18.73	17.40	17.50	15.52	$df=5, 301$
	SD	4.285	4.104	4.405	4.812	5.775	4.423	$p<.05$

4. 考察と今後の課題

本研究は, 女子大生のキャリア意識をCAVTを用いて解析し, 学年差と理想ライフコース別のキャリア意識を明らかにすることを目指した. RQ1, RQ2, RQ3の解析結果順に得られた知見を用いて考察し今後の課題を述べる.

4.1. 女子大生の理想ライフコース

RQ1では, 「女子大生の理想ライフコースはどのようなものか」を調査した後, 15年度調査と比較した. 本研究では, 15年度調査と同傾向が確認され, 出産を機に退職したいと考える女子大生は4割弱, 専業主婦を加えると5割強を占める. 女子

大生の理想ライフコースを見る限り、約半数は、出産・育児を中心とする家庭を重視する傾向が強いことが確認された。性役割に依存する女子大生への教育のあり方については、自己の役割を果たす重要性を認識させ、思考の転換を図るための重点的な教育施策の展開が必要とされる。

4.2. 学年との関連

RQ2「学年でキャリア意識に違いはあるか」の分析結果は、「1・4年」は「2・3年」よりビジョン得点が高値を示し、アクション得点では、「4年」は「3年」より、「1年」は「2・3年」より高値を示した。「1・4年」は「2・3年」に比べ、キャリア意識が高いことが示唆された。

キャリア意識の学年差の検討では「1・4年」のビジョン得点が「2・3年」より高値を示したのは、4月という調査時期が大きく影響したと考えられる。1年生はこれからの大学生活に期待し、4年生は就職活動により将来のビジョンが明確になっていたためと推察される。また、この傾向は女性特有のものでなく、男子学生においても同様の傾向が予想される。

4.3. 理想ライフコースとの関連

RQ3「理想ライフコース別でキャリア意識に違いはあるか」の分析結果では、アクション得点では有意差が認められない反面、ビジョン得点では有意差が認められた。「両立・非婚就業」のビジョン得点は、「わからない・専業主婦」より高値を示し、「両立・非婚就業」を選択した女子大生は、将来設計に対する意識が高いことが示唆され、キャリア自己効力感が高く進路選択行動を活発に行うことが推察される。

一方、「わからない・専業主婦」を選択した女子大生は、進路選択行動を回避し、将来について何も考えていない、考えたくないことが示唆されたが、働きたくないなど就業放棄の理由から「わからない・専業主婦」を選んだ可能性もある。

これらを明らかにするためにも、女子大生に影響を与えているであろう環境因子や、就労観・子育て観などの心理的先有傾向についても探索的に検討していく必要がある。また、図2のビジョン得点・アクション得点のヒストグラムでは、正規分布が確認されている。女子大生のキャリア意識の高低によってどのような特徴が見られるか、あ

るいは、クラスター分析等を用いたキャリア意識の類型化については、今後の課題としたい。

謝辞

調査にご協力頂いた女子大生の皆様に感謝いたします。

引用文献

- [1] 国立社会保障・人口問題研究所 (2017) 「2015年社会保障・人口問題基本調査(結婚と出産に関する全国調査): 現代日本の結婚と出産—第15回出生動向基本調査報告書—」
http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_reportALL.pdf, (参照 2017-8-21).
- [2] 文部科学省 (2011) 「第1章キャリア教育とは何か」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afildfile/2011/06/16/1306818_04.pdf, (参照 2017-8-21).
- [3] 戸田里和 (2013) 「女子大におけるキャリア教育の効果検証—進路選択に対する自己効力と生活目標と理想のライフコースに注目して—」『日本キャリアデザイン学会 第11回研究大会・総会 (2014年度大会) 資料集』, pp.68-71.
- [4] 林絵美子ほか (2012) 「大学4年間における希望業種の男女間比較」『キャリアデザイン研究』, 8, pp.161-170.
- [5] 平尾智隆 (2017) 「キャリア教育が大学生のキャリア意識に与える影響—実験的環境下での計測—」*NIER Discussion Paper Series*, 国立教育政策研究所, 6, pp.1-16.
http://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h28/nier_dps_005_201706.pdf, (参照 2018-2-1).
- [6] 佐野まゆほか (2007) 「大学生における性役割志向によるライフコース観の比較」『山梨大学看護学会誌』, 6(1), pp.45-52.
- [7] 渡辺三枝子 (2009) 「女性のキャリア形成支援のあり方—『ロールモデルに関する調査研究』の結果から—」『国立女性教育会館研究ジャーナル』, 13, pp.16-26.
- [8] 下村英雄ほか (2013) 「キャリア意識の測定テスト (CAVT) の開発」『大学生の学びとキャリア—入学前から卒業までの継続調査の分析—』, 法政大学出版局, pp.17-40.

Abstract

The present study aimed to analyze the career awareness of women's university students using the CAVT (career action vision test), and clarify their awareness according to the grade difference and their ideal life courses. The study subjects comprised 307 first- to fourth-year students, and their ideal life courses and data from the Fifteenth Japanese National Fertility Survey (Ministry of Health, Labour, and Welfare) were compared. This indicated that our data were similar to the distributions of representative samples of women's university students. Grade-based analyses revealed that vision scores were higher for first- and fourth-year than second- and third-year students. Action scores were higher for fourth-year than third-year students, and were higher for first-year than second- and third-year students. It was suggested that first- and fourth-year students have higher-level career awareness compared with second- and third-year students. Analyses according to the ideal life course revealed no significant differences in action scores; on the other hand, the vision score for "balancing and unmarried employment" was higher than that for "Unknown and full-time housewife". This suggested that students choosing the former have higher-level awareness of the concept of a life plan compared with those choosing the latter.

(受付日 : 2018 年 3 月 30 日, 受理日 : 2018 年 5 月 21 日)

戸田 里和 (とだ さとわ)

現職 : 大妻女子大学人間生活文化研究所研究員

上智大学大学院文学研究科新聞学専攻博士後期課程修了 (新聞学博士).

専門は, 新聞学. 現在は, メディア・コミュニケーション研究からキャリア教育に関連するパーソナルレベルのコミュニケーション研究へと幅広い領域の実証研究を行っている.